

京都教育大学フォーラム 2018

京都発：新しい時代の協働的な 「授業研究」の試み

日時：2018.12.15 (sat) 13:30～16:45

会場：キャンパスプラザ京都・第2講義室

京都市下京区西洞院通塩小路下る東塩小路町939



プログラム・タイムスケジュール

- ▶ 13:30 開会あいさつ
細川 友秀（京都教育大学長）
- ▶ 13:40 趣旨説明
清村 百合子（京都教育大学教授）
- ▶ 14:00 基調講演
柴田 好章（名古屋大学教授）
「大学と学校現場を結ぶ協働的な授業研究のあり方
－名古屋大学と愛知県教育委員会との連携に基づいて－」
- ▶ 14:50 話題提供
古賀 松香（京都教育大学准教授）
「協働研修で拓くこれからの幼児教育
－京都市市との取り組みから－」
高橋 詩穂・井上 美鈴（京都教育大学附属桃山小学校教諭）
「個に焦点化した校内授業研究会の取り組み」
津原 菜里（京都府城陽市立久世小学校教諭）
「全教員で取り組む教材研究から事後研究までの研修過程」
- ▶ 15:35 休憩
- ▶ 15:45 パネルディスカッション
「授業研究」を協働的にするためには何が必要か
- ▶ 16:40 閉会あいさつ
岩村 伸一（京都教育大学副学長（総務・企画担当））
- 司会進行 村上 忠幸（京都教育大学教授）

主催：京都教育大学
後援：京都府教育委員会・京都市教育委員会

ごあいさつ



細川 友秀 (HOSOKAWA Tomohide)

◆京都教育大学長

京都教育大学フォーラム2018にご参集くださいまして、誠にありがとうございます。
今年のフォーラムは、「京都発：新しい時代の協働的な『授業研究』の試み」をテーマとしています。

21世紀の社会は、情報化やグローバル化といった社会的変化が、人間の予測を超えて進展するようになってきています。とりわけ最近では、進化した人工知能(AI)が様々な判断を行ったり、身近な物の働きがインターネット経由で最適化されたりするIoT時代の到来が、社会や生活を大きく変えていくと予測されています。さらに、情報技術の飛躍的な進化などを背景として、経済や文化など社会のあらゆる分野でのつながりが国境や地域を越えて活性化し、多様な人々や地域同士のつながりがますます緊密になり、一つの出来事が広範囲かつ複雑に伝播し、先を見通すことがますます難しくなってきています。

このような社会でこれから生きる子供たちには、将来の予測が難しい社会の中でも、予測できない変化に受け身ではなく、主体的に向き合っており合い、伝統や文化に立脚した広い視野を持ち、志高く未来を創り出していくために必要な資質・能力を一人一人に確実に育む学校教育が必要です。そのため、現在、学習指導要領等の改訂が進められ、移行期間を経て幼稚園から小、中、高等学校へと順次全面实施されつつあります。

新しい学習指導要領では、「生きる力」とは何かを資質・能力の三つの柱【①生きて働く「知識・技能」の習得、②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成、③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養】に沿って具体化し、そのために必要な教育課程の枠組みを分かりやすく再整理しています。そして、子供たちに「生きる力」をバランスよく確実に育むことを目指し、全ての学習の基盤となる力を明示し、それらの力を子供の発達の段階に応じて確実に育むことができるよう、関係する教科等とそれらの力とのつながりを整理しています。また、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を示して、それらの資質・能力を各学校が地域や子供たちの実情に応じて教科横断的な視点で教育課程全体を通じて確実に育むことを求めています。

このように、新しい学習指導要領が求める学びを実現する授業を設計、実施することが現在大きな課題となっています。この意味で、今年のフォーラムのテーマ、「新しい時代の協働的な『授業研究』の試み」は実にタイムリーであると思っています。参加された方々が、本日のフォーラムにおいて実りある議論を深められ、授業実践の向上に繋がられるように祈念してご挨拶とさせていただきます。

基調講演 テーマ「大学と学校現場を結ぶ協働的な授業研究のあり方 —名古屋大学と愛知県教育委員会との連携に基づいて—」



柴田 好章 (SHIBATA Yoshiaki)

◆名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授

名古屋大学大学院教育学研究科博士後期課程修了、博士(教育学)。上越教育大学助手・講師を経て、2001年より名古屋大学助教授、2015年より現職。専門は、教育方法学、教育工学。研究テーマは、授業分析による授業諸要因の関連構造の解明、量的手法と質的手法を統合した授業分析手法の開発、「協働共育型ミドルリーダー」の育成など。

これまでも大学と教育現場の協働の重要性は繰り返し主張され、各大学においては教育の質の向上のために学校との連携が図られてきた。名古屋大学教育発達科学研究科では、愛知県総合教育センターと連携協定を結び、学校における組織的研究推進や若手育成にリーダーシップを発揮するミドルリーダー育成の研修と研究に取り組んできた。ところで、大学と学校現場の真の意味での協働とは、どのようなことを意味するのであろうか？本講演では、以下の点を中心に問題提起しながら、授業の改善や教師の成長を目指した授業研究のあり方を議論するきっかけを提供したい。

1. 大学と学校・教育委員会との連携の実際 ～可能性と課題～
2. 互恵的な関係性とは何か？ ～協働の価値と、双方の固有の役割～
3. 学校での授業研究のあり方 ～参加型授業研究のモデル～
4. 授業洞察力向上のための教師教育教材の提案 ～授業分析の成果の活用～

話題提供



古賀 松香 (KOGA Matsuka)

◆京都教育大学准教授

H24年度に本学着任後、主に京都市の幼児教育現場と協働的な立場で研究を進めている。文部科学省『幼稚園教育要領解説』作成協力者、文部科学省「幼児教育の実践の質向上に関する検討会」委員、厚生労働省「保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会」構成員、国立教育政策研究所幼児教育研究センター研究分担者。

保育・幼児教育界は、国公私立の幼稚園／保育所／認定こども園の他、0～2歳児の少人数保育を行う地域型保育事業からベビーホテルなどの認可外保育まで、多種多様な園が存在し、質の格差は広がっています。幼児教育は人形形成の基礎を培う重要なものであり、その質保障と向上は子どもの人生に関わる問題です。全ての幼児教育施設が協働的に実践の課題を捉え、真の学び合いが生まれる研修を作りたいと願い、京都教育大学幼児教育協働研修を立ち上げました。

方法は、本学附属幼稚園の普段の保育の公開、グループ別の焦点観察、事後協議、指導助言で構成した公開保育検討会とし、京都府下の全幼児教育関係者を対象として始めました。毎回多様な園からの参加者が保育を見合い、実践課題に焦点化した議論を行いますが、事後協議の充実には、研修の枠組みと参加者のフラットな関係形成が重要です。

本日は具体的な展開と、今後の研修と大学のあり方について提起したいと思っています。



高橋 詩穂・井上 美鈴 (TAKAHASHI Shihoh・Inoue Misuzu)

◆京都教育大学附属桃山小学校教諭

高橋 詩穂 (写真左)：京都教育大学大学院を修了し、西宮市内小学校で勤務、その後附属桃山小学校に勤務。音楽教育を専門とし、伝統文化教育研究の主任として子どもの創造性を育む教育の研究を進めている。海外の音楽教育の研究に関心を持ち視察等を積極的に行っている。

井上 美鈴 (写真右)：京都教育大学大学院修了後、附属桃山小学校に勤務。臨床心理士の資格を有し、個と集団の変容を捉えるための見取りに興味を持ち、研究を続けている。現在、桃山地区三校園連携研究の研究主任として、幼・小・中連携の取り組みを進めている。

本校は、学びの出発点や着想点を子どもに置いた、「子どもの側から教育を発想する」ことを研究の基盤に据え、「子ども中心主義」の理念を貫く授業の研究を長年行ってきました。それゆえ、私達は、授業における個という一人ひとりの学びに注目します。教員それぞれ個の姿を追い、その記録をもとに授業研究を行います。個が教材(対象)とどのように向き合い、問いを見出し、その解決を目指して集団の中であり合いながら学んでいったのか。個の内に何が働きかけていたのか。私達は、自分の捉えた子どもの姿をとおして、その授業を捉え直していくのです。つまり、授業のねらいと子どもの間のズレはどこで、そしてなぜ生じたのか。子ども達の問いは、一人ひとりにおいて本当に成立していたのか、それは妥当であったのか。子どもの側に立って授業を視たとき、その授業の姿が明らかになっていきます。



津原 菜里 (TSUHARA Nari)

◆京都府城陽市立久世小学校教諭

宇治市内小学校3年、城陽市内小学校6年の勤務を経て、久世小学校での勤務5年目になります。現任校は平成29年度より京都府小学校教育研究会音楽科研究部の研究協力校となり2年目を迎えています。現在、研究主任として、研究を推進する立場にあります。

本校は平成29年度より京都府小学校教育研究会音楽科研究部の研究協力校となり、学校全体で音楽科の研究を進めています。本校では、音楽専科の教員を置かず、学級担任が音楽科の授業を担当しています。中には、音楽の授業は苦手という教員もいます。そこで、研究初年度に掲げたテーマが「誰でもができる音楽授業」です。ただ歌ったり、ただ演奏したりするだけでは、音楽的な技能や思考力は身に付きません。子ども達に確かな力を付けさせるために、何を目標とし、どのような手段を用い、どのような過程で取り組むのかを明らかにし、教員全員で教材研究を行い、それを基に指導計画を立て、仮説生成模擬授業により再検討を加え、その場でみんなで授業をつくり上げていくという方法をとっています。そのことが「誰でもができる音楽授業」に結びつくと考えています。

子ども達に主体的に学ばせるには、教員がまず主体的に学ぶことが大切だと考えます。そのためにも、全教員が主体的かつ協働的に学ぶ「授業研究」をさらに模索していきたいです。

開催趣旨

清村 百合子 (KIYOMURA Yuriko)

◆京都教育大学教育学部教授

プロフィール：小、中、高等学校等の音楽科の授業実践を研究対象とし、理論的枠組みに基づいて実践分析を行い、授業実践の質的改善を目指す「音楽教育実践学」を専門としている。『学校における「わらべうた」教育の再創造－理論と実践』（黎明書房 2010）、『日本伝統音楽カリキュラムと授業実践－生成の原理による音楽の授業』（音楽之友社 2017）など（いずれも共編著）。

学校教育現場では 21 世紀の学びを保証するために「問題解決力」や「協働的な学び」が注目される中、教師自身も自ら授業実践を省察し、創造的に解決し、なおかつ協働して取り組む姿勢がいま、求められています。そこで今回のフォーラムでは 21 世紀型教育に対応した新しい時代の協働的な「授業研究」はどうあるべきか、その方向性を探ることを目的とします。校内研修の一環に「授業研究」を位置づけている学校も多いですが、そこでいかに協働的な関係を担保するかがこれからの授業研究に必要となってくるでしょう。今回は「授業研究」を協働的に実現するための具体的な方法について、基調講演および話題提供をしていただきます。フォーラムを通して理論と実践の連携を強化し、教員養成および教師教育における「授業研究」の手がかりを得ることを期待しています。

京都教育大学発：新しい時代に求められる協働的な「授業研究」

本学では附属学校や地域の小・中学校の教育現場と連携して、さまざまなプロジェクトに取り組んでいます。幼児教育から小学校、中学校、高等学校、特別支援教育まで校種も多様で、かつそのテーマは情報化、グローバル化、英語教育など新しい教育課題に対応した研究を多く含んでいます。このように教育課題が多様化する一方、その焦点は「授業をどうするか」という、授業研究を通して課題解決に取り組んでいることにあります。つまり地域の教育現場が抱える今日的課題を解決するためには、授業研究という方法論をいかに構築するかが重要になってきます。

近年では教師の専門職集団における同僚性が意識されるようになり、授業研究においても熟練教師が知識や指導技術を一方的に伝授していくという従来の方法ではなく、共通の目的に向かって問題を解決するという協働性を重視した方法が増えてきています。例えば継続して参加型の授業研究プロジェクトに取り組んできた名古屋大学では、「授業の事実から出発する」という点を重視しています。既存の理論から一方的に授業をとらえたり、理論と整合する事実のみに注目したりなどしないで、あるがままの子どもの学びのあり方をとらえることを基本原理とし、そのためにワークショップ型の集団作業を授業研究に取り入れています。

協働的な授業研究を実現するための方法論の確立は、協働して学び続ける学校組織をつくり出し、教師の専門性の向上をもたらします。大学と教育実践現場との連携の中心に教師の学びを支える協働的な授業研究を位置づけることで、本学が地域の教員養成および教員研修を牽引する中核組織として機能することを期待します。